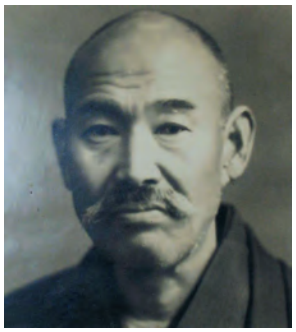

江刺金札米の父

小澤懐徳

四百年ほど前、今の奥州市江刺区地方は、仙台藩の伊達の殿様が治めていた。殿様は、江刺の広大な平野を米がたくさん取れるところにしたいと考えて、人首川から水を取り入れる堰と約３０００メートルの水路を作った。この樋茂井堰が江刺平野の水路整備の始まりである。

ところが、日照りが続いて稲が枯れたり、せっかく作った水路も洪水で壊れたりして、なかなか思うように米がとれない時代が長く続いた。

そうした江刺の状況を何とか良くしようと力をつくした先人の努力で、今では、米の艶やおいしさが格別で、市場価格が毎年Ａランクの高値となる江刺米が『江刺金札米』として、全国的に名が知れ渡るようになった。その先人の中の第一人者が、江刺区愛宕の小澤懐徳である。

小澤懐徳は、一八七三年（明治六年）、今の前沢区古城に生まれた。懐徳が十歳の時に、槍の指導者であり寺子屋の先生でもあった父親行雄が死亡した。その後は、十七歳年上の兄貞太郎が父親代わりとなった。兄は、仙台藩主や武士の子が入学する仙台藩校の養賢堂などで学んだ後、桃林塾を開いて日本文化を教え、さらに胆沢郡選出の県会議員、農村子弟を教える古城村村長、衆議院議員となった人であった。懐徳にとっては、何事にも基本を大切にしながら厳しく提言してくれる兄であった。

懐徳は、十六歳でその才能を認められて古城村役場の庶務係に採用されるが、翌年、江刺郡愛宕村（現・江刺区愛宕）の小澤ハツネと結婚するために退職した。その後、水沢の税務署や江刺の郡役所に勤め、その間日清・日露戦争にも従軍した。

懐徳が三十六歳のときには江刺に戻り江刺の発展に努めることとなる。こうした折、一九〇九年（明治四十二年）耕地整理法の改正があり、これを推し進める運動が盛んになった二年後、江刺郡愛宕村の助役となり、指導者としての期待も高まっていた。

当時の江刺郡西部は土質がよかったが、水路が未整備だったので水の引き落としが十分ではなく、台風などの洪水に稲は流され、日照りには水引き争いが起きるので、村人からの苦情が絶えなかった。当時の村長は、村単独では無理なので国策と合わせての開発と考え

ていたところ、助役の懐徳が秋田・山形の両県の耕地整理の視察者に選ばれ、研修を受けることになった。

こうした研習を積み重ねた後、北上川から取水する水路を新設し、昔からの用水路に繋いだ。この工事により、多くの水田が潤うことになった。そしてさらに、旧水路の補修工事、開墾、水田の整地などが必要になってきた。

一九一九年（大正八年）、四十歳の時には、愛宕村の村長となりその後二十年間に亘り村長を務め、また村の農会長（今のＪＡ）も兼務した。懐徳はまず、村の産米増産の目標を立て、草鞋ばきで村人の指導にあたった。村民一体の努力が実り、懐徳が村長になってから五年目には、米の出来高が二・五倍になった。

懐徳は、実績を認められて郡農業会長となった。このとき、懐徳は江刺米の課題は、品質の改善だと考えた。そこで懐徳は、冷害にも強く味も特別良い『陸羽百三十二号』という種籾を秋田県から個人のお金で買い入れ、希望者に配布した。初めのころはこの種籾の希望者が少なく、普及するのに苦労した。

この味のよい江刺産米の宣伝のため、懐徳は東京で試食会を開き、品質日本一という評価を得た。この米には金色の札をつけて売り出したので、『江刺金札米』の名声が広まった。

こうして着々と農業の改善が進められていったが、江刺の基本水路はまだ十分ではなかった。胆沢平野の水利を紹介するとともに、画期的な水路と給水の構想計画を立てて村人に提案した。経費のかかるこの計画への反対者が多く、懐徳は「農は国の基、百年の計が大切」と信じ、これが江刺の村人の幸福と説いた。その結果、江刺の耕地整理組合の総会では全員賛成し、工事が決まった。工事が始まってからは、初めのころ反対していた人たちも協力を惜しまず、工事は予定通り進み、水利は近代化され、現代のような豊かな実りの秋を迎えられるようになった。

一九三五年（昭和十）十一月、懐徳はその農業への業績を讃えられ、新宿御苑の観菊会に招待を受け、単独で天皇の拝謁をするという栄誉を受けている。

しかし、懐徳は村長退職の翌年、一九三六年（昭和十一）二月二十八日、人々に惜しまれながら六十四歳の生涯を閉じた。

小澤懐徳胸像

一九五七年（昭和三十二）、懐徳の業績を讃えた『愛村公園』が設けられた。愛村とは、懐徳のペンネームで、懐徳の胸像とともに、歌碑が立てられた。

都には　あこがるるとも
村人の　つちかう業を
　捨ててなるべき　愛村

華やかな都会にあこがれることがあっても、村人の大事に育てた農業を捨ててはいけないよという意味である。

＊参考文献

『胆沢・江刺の先人物語』
『江刺平野開発の先覚者　小澤懐徳』

金札米販売キャンペーン及び試食販売に産地プレゼントとして活用しております“テレフォンカード”

全国の江刺金札米取扱店に販売促進用資材として産地が提供しているＰＲ用の“のぼり”